

— 書 評 —

許雲樵・蔡史君編／田中宏・福永平和訳

『日本軍占領下のシンガポール』

(青木書店)

(九州大学法学部助手) 田村 慶子

本書は、1984年にシンガポールで出版された『新馬華人抗日史料1937～1945 (Malayan Chinese Resistance to Japan 1937～1945 — Selected Source Materials)』(文史出版)の部分訳であり、日本ではいまだにほとんど知られていない日本によるシンガポール占領の歴史である。

「検証」——華人(中国人)虐殺事件、圧政、日本軍政下の市民生活、「抗日」を生きる、の4章から成り、そのほとんどは体験者の証言である。

まず、各章の内容を紹介する。第1章は衝撃的な「検証」の実状である。「検証」とはシンガポールの抗日分子を選別する検査のことである。1942年2月15日にイギリスが降伏した後の2月21日から3月10日にかけて、18歳から50歳までの華人(後に女性は帰されて男性のみとなった)はすべてシンガポール島内5地区に食糧持参で集合させられた。検査の方法は甚だいい加減で、蔣介石と汪精衛とどちらが正しいかという質問での選別から、政府機関や銀行に勤務していたり、ある程度の資産がある者、果ては体格のよい者や身体に入れ墨のある者はすべて抗日分子とされて拘束された。彼らは海上や海岸であるいはジャングルの中で数珠つなぎにされて機関銃の掃射を受け、もしくは自ら掘った穴の前で刺殺された。まさに南京大虐殺に劣らぬ凄惨な大量殺戮であった。犠牲者数についてはもとより正確な数字は不明であるが、シンガポールでは4万人から5万人と推計され、日本では元憲兵隊関係者の証言等で5千人から1万人とされている。1984年度の日本の中学社会科歴史教科書は初めて「検証」虐殺事件を取り上げ、虐殺された人数を2万人とした。2万人でも当時

を知るシンガポール人からすれば不満なのだが、文部省の検定によって6千人以上と改めさせられたという。

第2章では、日本軍の暴政や汚職が体験者によって証言されている。なかでも注目すべきは日本軍が強制的に組織させた「華僑協会」を通し、抗日の「罪」の代償として5千万ドルを献納させたことである。シンガポールの多くの華人は「検証」で家族や友人を失い、奉納金のために財産を失うことになった。また、日本軍は華人を徹底的に搾取・弾圧する一方で、一部のインド人やマレー人を優遇して華人管理を直接担当させるという狡猾な手段を使った。華人弾圧の直接の責任者となった彼らの多くは、戦後処刑されたり集団リンチに遭ったことが述べられているが、裁かれるべきは彼らではなく彼らを利用した日本にあるのは言を待たない。また従来あまり知られていない事実として注目されるのは、労働力不足を補うために多数のジャワ人がインドネシアから強制連行されたことで、その8割が病気や栄養失調で死亡したことも証言されている。

第3章では日本軍政下の市民生活として、インフレで日々苦しくなる人々の生活とともに強制的な日本語教育や「大東亜共栄圏」宣伝のための各種新聞事業が皮肉をこめて生き生きと描かれている。また、日本軍が布告した居住、旅行、消費、商売等に関する禁令は厳しくかつ詳細なもので、少しでも違反すれば生命に関わり、しかも朝令暮改の告示も多かったため、住民は常に戦々兢兢としていなければならなかった。第4章では日本軍の圧政に対する組織的・非組織的抵抗が2名の生存者の体験のなかに語られている。

このように本書は、生存者の体験を主に、日本軍のシンガポール統治の実態を描いたものであり、我々に改めて「大東亜共栄圏」なるものの詭い文句と実質の大きな隔りを認識させてくれる。訳者田中宏氏は、本書に欠けている日本軍の検証方針

を補充し、また日本におけるこの事件の推移をわかり易く解説しているが、ただ惜しむらくは、本書は研究書ではないために占領直後のこのような大虐殺がなぜ行われたのか、その背景についての説明が欠けていることであろう。大虐殺の背景についてここで簡単に述べておきたい。

シンガポール総人口（占領時で約80万人）の76%を占める華人は元来中国本土からの移民であり、孫文が「中国革命同盟会」シンガポール分会を1906年に結成して以来、東南アジアの華人の愛国運動の拠点となっていた。日本の中国本土侵略に対しては組織的な祖国救済運動を展開し、日本商品ボイコットや中国国民党への献金を行っていたのである。シンガポールの華人の90%が何らかの形で救済運動に参加していたと言われる。日本軍侵攻時に最後まで激しく抵抗したのも華人を中心とする抗日義勇軍であった。そのため日本軍はシンガポールの華人を厳しく警戒し、侵攻に先立ってすでに一般市民を含む徹底的な粛清を意図していた。一説にはシンガポールの人口の半分を殺害する決定がなされていたと言う。大虐殺はこの結果であり、用意周到になされた計画的殺戮であった。犠牲者数も、1962年に始まった遺骨発掘で大規模な集団虐殺が行われなかったとされる地区から2千遺体余りが発見されたこと、虐殺は主に海上や海岸で行われ遺体の発見が困難であることを考慮すれば、シンガポールで住民登録等の調査を基に一般的に推計されている4, 5万人という数字の方が先述した文部省の6千人以上という改定よりははるかに信頼できると思われる。

日本政府は1967年の対日賠償問題（いわゆる「血債問題」）の決着によってこの問題は終わったとし、日本の学者もジャーナリズムも大虐殺の事実をタブー視してほとんど取り上げてこなかった。従って、日本のシンガポール統治の実態について日本ではほとんど知られていないのである。一方、シンガポールの小、中学校の社会科の教科

書には、わずか3年半の日本占領時代の記述に100年余にのぼるイギリスの植民地統治に倍するスペースが割かれているのであり、シンガポールの人々は今でも決して忘れていない。このように加害者の日本と被害者のシンガポールの間には大きな意識のギャップが存在するのであり、虐殺から目をそむけようとする現在のような我々の状況からは、歴史を直視してそこから真摯に学ぶ精神は生まれないだろう。

本書は我々が日本統治時代の歴史を学び、さらにはこの時期の歴史に対するシンガポール人の心情を理解するという重要な意義を有しているとともに、従来の日本の太平洋戦争史関係の研究には欠落していたアジア各地での数々の虐殺事件に本格的にメスを入れる第1歩としての意義をも有していよう。

（1986年8月，四六判，340頁，2800円）

---

（58頁からつづく）

言葉が頻繁に使われた。もちろん、悲劇の当事者としてのその婦人の心情は理解できる。だが私は、無神経にこうした言葉を聞き流しているNHKの司会者に腹が立った。

ことしの大仏次郎賞を受けた井出氏の本書、一読をおすすめしたい。（'86 12/2）

（1986年1月刊，B 6 判，306頁，1300円）